

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第一六章 午前三時四七分 ？

ミス・ペティグールは恥ずかしそうな顔で現れました。
「若い方はお別れを二人きりでなさりたいですものね」
「なんていいお目付け役なの」とミス・ラフォース。「あなたときは任せておいてね」
「さあ」とミス・ペティグール。「ずいぶん遅いですわ。すぐベッドにお入りになって、ぐっすりおやすみになったほうがいいわ」
「あら嫌よ」とミス・ラフォースがせがみます。「全然眠くないもの。座ってちょっとおしゃべりしましょうよ。男の人は男の人でいいけれど、女同士の噂話もあたい大好きなの」



島田圭子画

「不思議ですけどね」とミス・ペティグルーは嬉しそうに言いました。「あたくしも全然疲れておりませんの」

二人は暖炉の前に座りました。

「本当にマイケルと結婚なさるんですね」とミス・ペティグルーが満足げに言いました。「ええ」とミス・ラフォース。

「どんなに嬉しいかとても言い表せませんわ」とミス・ペティグルーは熱心に言いました。「これでほっといたしました」

「そんなに心配していたの？」

「ええ」とミス・ペティグルー。「いつかニックはあなたを不幸せにすると分かっていますから。他人があれこれ言うのは簡単ですし、恋の痛みに苦しむのが自分だったらまた話は別だということも分かっていますけれど、人生には恋のためにすべてを失うわけにはいかなさういがあるのですわ」

「その通りね」とミス・ラフォースは真面目に言いました。「でもあなたがいなければ、あたくし、ぜつたいに捕まったままだった。どうしようもなかったの。ニックが『来い』と言ったら行かないわけにはいかなかった」

二人は少しの間、口をつぐみました。それぞれ心の目にはニックが部屋からゆっくりと消えていくのが映っていました。ニックの黒髪、輝く黒い瞳、辛らつな舌、人をひきつけずにはいけない眼差し、洒落た小さな黒い口ひげ、しなやかで猫のような身体。ニックは今回は負けました。でもきつと征服を続け、他の女たちに喜びと悲しみを与え続けるでしょう。ミス・ラフォースはずっと自分の後釜に座った女たちを憎み続けるでしょう。ミス・ペティグルーは最後にもう一度ニックのことを思いました。悪い男ではあっても、魅惑的な男には違いなのですから。

「ああいう男がいるのですわ」とミス・ペティグルーは言いました。

「そうね」とミス・ラフォースは低い声で言いました。「ニックはね」

ミス・ペティグルーは身を乗り出してミス・ラフォースの手を取りました。

「でももう違いますわね」とミス・ペティグルーは懇願します。「もう違っていて約束してくださいまし。ニックがひざまずくことがどうしようが、ぜつたいに彼のところに戻らないって」

ニックの幻の前で、扉がぴしゃりと閉められました。

「ええ二度と」とミス・ラフォースは真剣に約束しました。「あなたの言つとおりだったわ。マイケルがニックの前に立ちはだかったとき、急にマイケルのことが素敵に思えたの。でもニックが怒って立ち上がったら、ニックがかっこよく思えたわ。でもあのとき……彼がためらったとき……分からない。ただ、何かが心の中でカチッと消えたの。そしてニックがただの……ええ、ただのアイスクリームに見えた。そして彼は溶けて消えちゃった。そういうこと。あの人が頑張ってもあたくしはもとに戻らないわ」

「よかった!」とミス・ペティグルーはため息をつきました。「なんとも言いようがあ

りませんわ」

「なんて一日だったのかしら！」とミス・ラフォース。「何もかもうまくいなくて、何もかもうまくいったわ。でもあなたが来てくれてなかったらどうなってたか、怖くて考えられない」

「まあそんな！」とミス・ペティグルー。「そんなこと！」

そして急に思い出しました。まだミス・ラフォースに自分がどうしてここに来たのか、話していません。つまりこれまでもそのことに触れないできましたが、正直に言わないままでは落ち着いて眠りにつくことができません。今がそのときです。これ以上、避けるわけにはいきません。

「申し上げなくちゃいけないことがございます」とミス・ペティグルーは緊張した声でいいました。

「何かしら」とミス・ラフォースが期待するように言いました。

「どうしてあたくしがこちらに伺ったかです」とミス・ペティグルーは勇敢に続けました。「一度か二度、申し上げようと思いましたけれど、そのたびにさえぎられてしまいました」

「だって聞きたくなかったんだもの」とミス・ラフォース。「人について知ってしまうと、楽しいことが台無しになるわ。もしあなたが真空掃除機を売りにきたなんていったら、がつくりよ！ だれが掃除機のセールスの人に胸をわくわくさせたりする？ そうじゃないって言って、ね？」

「違います」とミス・ペティグルー。「でも今度は聞いてくださいまし」

「ちゃんと聞くわ」とミス・ラフォース。「ほんとに知りたいから。最大のピンチの真っ最中に、バン！ どこからともなく奇跡の人が現れて、あたしを火の中から救い出してくれたんですもの」

「あたくしは家庭教師なんです」とミス・ペティグルー。「ミス・ホルトの職業斡旋所で家庭教師のお問い合わせに応募して参ったんです」

とうとう言ってしまう。顔をそむけます。正体をあらわにしてそこに座っています。そう、ミス・ペティグルーはミス・ラフォースに仕事をもらいにきたのです。

「あたしの問い合わせ？」とミス・ラフォース。

ミス・ペティグルーはうなずきます。

「ミス・ホルトがここの住所をくださいましたの」

「ああ！」とミス・ラフォースの顔から表情が消えました。ちょっと間があきます。

「男の子がいい、それとも女の子？」

「まあ！」とミス・ペティグルーはおろおろと言いました。「違う方を言ってしまうかもしれませんわ。でも、みんな好みはありますものね。正直に言いますけれど、あたくし、小さい女の子のほうが性に合うような気がしますの」

「二人いたら困る？」とミス・ラフォース。「男の子と女の子、一人ずつ」

ミス・ペティグルーはさつとあたりを見回しました。ミス・ラフォースを愕然とした顔で見ると、慌てて目をそらしました。

「いえいえ、とんでもない」と急いで言います。「これまで何度も二人ということがありましたわ」

ミス・ラフォースは笑い声を響かせました。「まじめねえ！ 心配しないでいいわ。からかっただけよ。子供なんていないの」

「いない？」

「いないのよ。うんと小さいのよね」

「ああよかった！」ミス・ペティグルーは安堵のため息をつきました。

「でもあたしに子供がいるかもって思ったんでしょ」ミス・ラフォースはちよつとなじむように言いました。

ミス・ペティグルーはこつちを見て、あつちを見て、真っ赤になります。

「本当にお詫びいたしますわ」おたおたと言います。「どうかお許しになって。まあ、どうしてそんなこと考えたんでしょう！」

「あら簡単じゃない」とミス・ラフォースが口の端を持ち上げます。

ミス・ペティグルーはとがめるような顔をしました。「それじゃどなたのお子さんなんですか？」と威厳をこめて尋ねます。

「どの子のこと？」

「あなたのお子さんです……つまり……お子さんっていうのは……家庭教師がいるって……斡旋所で」とミス・ペティグルーはまごついて言いました。

「子供なんていないのよ」

「いない？ 全然？」

「全然」

「でも、あなたのお問い合わせは？」

「メイドを頼んだの。メイドがちよつと前に辞めたのよ。ミス・ホルトが住所を間違えたのね」

「まあ！」ミス・ペティグルーは低い声で言いました。「そうですね。同じときにメイドの問い合わせもありました。そう言っておりましたもの。それじゃもう遅いわ。あたくしの仕事はもうぶさがっているわ」

「でも」とミス・ラフォースが用心深く言いました。「あたしにはそのほうがよかったわ」

「なんですって？」

「提案があるの」とミス・ラフォース。「言いくいんだけど。あなたはレディだって知っているから。怒らないでくれるかしら？」

「怒るなんてとんでもない」とミス・ペティグルーはひそかに嬉しくなりました。

「マイケルとあたし、結婚するでしょう。本当にすくなの。でもマイケルには困った夢

があるのよ。広い部屋がいっぱいある大きな家に住みたいんですって。子供の頃、九人家族で狭くて壁につぶされそうなフラットに押し合いへし合いして、自分の部屋なんてもてなかつたって言うの。だから広い空間が欲しいんですって。もう素敵な家に目をつけてるの。でもものすごく大きいのよ。二人でそこに住むんだけど、あたし家のことなんてできないわ。家のことなんて何も知らないもの。それにリハーサルがあつて出かけるし。困ってるの。でね……もしかして、あなた、今のお仕事をやめてあたしたちと一緒に住んであたしの代わりに家の面倒を見てくれないかしら？」

「あたくしが？」ミス・ペティグールはささやきました。「あたくし……があなたとマイケルさんと一緒に住むんですって？」

「あたし、邪魔しないようにするわ」とミス・ラフォースは請合います。「約束する。あなたがいいと思うように家を切り回してちょうだい。もちろんメイドも雇うわ。そんな仕事を頼むのはためらっちゃうんだけど、でもそつしてくれたらあたしには本当にありがたいの。わがままでしょう？ でもその図が目に浮かぶわ。家のことがすつと片付いて、マイケルの食事はいつも時間通り。パーティーを開いたらあなたは完璧なホステス役よ。そうしたらあたしはばたばたしないで、何もかも安心して自分のパーティーのお客さんでいられるわ。ね、考えてみていただけじゃない？ 今すぐ決心しなくてもいいわ」

ミス・ペティグールは震えだしました。輝かしい光が広がっていきます。もう恐れることはありません。ついに安息が訪れたのです。まるで自分の家のように切り回せる家。ああどんなにそれにあこがれていたことか！ 買ひ物をし、注文をし、他の主婦たちと同じように。恐ろしい子供たちとも怖い母親たちともおさらばです。好きなようにお花を部屋に飾り、またお料理をやってみることもできます。四〇になるけれど、娘の頃に家を出てからちゃんとしたお料理などしたことが一度もないのです！ 孤独は去りました。ああなんと甘い幸せ！ 信じられませんが。これは地上の天国。心の平安。そう、とうとう訪れた平安なのです。

突然、ミス・ペティグールは泣き出しました。うつむいてすすり泣きます。ミス・ラフォースは急いで腕をその身体に回しました。「まあ、グウィネヴィア！」

しばらくしてミス・ペティグールは目をふきました。鼻がほんの少しピンクになって、唇が赤くなっていますが、瞳は輝き、明るい顔をしています。

ミス・ペティグールはミス・ラフォースを見つめました。

「ちゃんとお分かりのくせに。ご親切をしてくださっているのはあなたですわ、あたくしじゃなくて。あたくしはとても貧しい家庭教師です。それにとて駄目な家庭教師ですわ。家庭教師の仕事なんて大きらい。嫌でたまりませんの。これまでずっと重荷でした。あたくし子供は苦手なんです。年を追うごとに子供が怖くなってきました。仕事を変わる度に条件は前より悪くなります。毎度、お給金が下がりますの。最後の家ではただの子守でした。だんだん年をとってまいります。もうじきお給金の低い仕事でも就けなくなりませう。救貧院に行くほかないところ、あなたはあたくしに家庭をくださるう

というんです。感謝のしようがありません。なんてお礼を申し上げればいいのかしら。あたくし口下手なんですの。でも地下室から屋根裏まで、お家のお世話をして、あなたをがっかりさせるようなことはしませんわ」

「あら、グウィネヴィア、そんなに働いちゃだめよ」

ミス・ラフォースがとがめます。

「いいえ、させていただけます」とミス・ペティグルーは晴れやかに答えます。

「へとへとに疲れてもらっちゃ困るわ」

「好きなお仕事は楽しみなんですわ」

「それじゃ、そんなに楽しまないようにしてもらわなきゃ」

「物事をきちんとするか、全然しないかのどっちかじゃないと嫌なんですの」

「そういうことはメイドに頼んでちょうだいよ」

「そんなことして、メイドは青いお花を緑のお部屋においたり、大事な花瓶を壊したり、ベッドに湿ったシーツを敷いたりするんですわ！ ぜったいにいけません」

「きちんと働かないなら辞めなさいって言えばいいのよ」

「あたくしが監督して、メイドにきちんとお仕事をさせますわ」

「いろんな場所にいつべんにいようとて病気になったらだめよ。そんなの嫌よ」

「お家を切り盛りするのは」とミス・ペティグルーが憤然として聞きました。「あなた？ それともあたくし？」

「あなたね」とミス・ラフォースが身を縮めました。

「それなら結構ですわ」

「そうだね」

問題は解決しました。

ミス・ペティグルーの顔が急にかけりました。「でもマイケルは？」と気がかりな様子です。

「これ、マイケルが思いついたのよ」とミス・ラフォースが熱心に請合います。「あなたは彼の幸運のお守りなんですって。だからなくしたら困るって。あたしと結婚するにしても、気持ちよく暮らせる家が欲しいって言うの。でも、あたしはだめ主婦だもの」「なんてお優しいんでしょう！」「ミス・ペティグルーは幸せいっぱいに言いました。「マイケルさんたら、嬉しいことをおっしゃって。初めは慣れないかもしれませんけれど、誠心誠意、尽くしますわ。あたくし学びます。」「心配はいりません。あたくし、もう怖くありませんの。生まれ変わったんですわ」

突然、ミス・ペティグルーはミス・ラフォースのほづに身を乗り出すと、勢い込んで尋ねました。

「あたくしのこと、お好き？」

「あなたが好きかって？」ミス・ラフォースは驚いて繰り返しました。「好きに決まってるわ」

「本当に、心から？ あたくしがちょっとばかりお役に立ったから礼儀としておっしや
つてるんじゃないくて？ 本当に、本当にあたくしがお好き？」

「そうね」とミス・ラフォースは優しく言いました。「あなたほど好きになった女の人
はいないと思うわ」

「男性もあたくしを好きになると思います？」

「もしあたくしが彼の年で」とミス・ラフォースは遠慮がちに言いました。「それであな
たがその年齢なら、きつと思いつきり恋に落ちちゃうと思うわ。さっき電話をかけてき
たのジョーなのよ。明日、こっちに来るって」

ミス・ペティグルーは立ち上がりました。背筋を伸ばして胸を張ります。目がきらき
らと輝いています。

「とつとつ」とミス・ペティグルーは言いました。「あたくしにも恋が訪れたんですわ
ね」

(完)